

## カレシ考

一

いつの世にも言葉について話題の種は尽きないものだが、昨年巷では「コギャル語」なるものが盛んに取り上げられた。移り変りの激しい昨今ゆえ、もはや昔話になっ  
ているのかもしれないが、その実体は女子高生という、現代日本において立派に一個の独立した階層を成すともいい得る一群の若年女性の使用言語であるらしい。

もっともその一群の構成員の中には、とかく女子高生というだけで過剰に反応しがちな現代日本の別の一群、マスコミ「おぢ」族が勝手に盛り上げていただけで、巻き込まれてえらい迷惑、との不満を洩らすムキもいるらしい。とはいえコギャルと呼ばれる女の子たちが、その

中 島 由 美

外的特徴たる白いだぶだぶソックスや細い眉など、独自の文化現象を担う集団であることは確かであり、その使用言語が問題とあれば我々言語研究者も無視しているわけにはゆかない。彼女らの言語行動こそが、明日の言語の行方を占う鍵となるかもしれないではないか。

そんな去年の秋も深まった頃、新聞紙上で某広告批評家があるCMを取り上げているのが目に止まった。そのCMというのは、女子高生らしき娘の「カレシ」という発音を父親が「カレシ」と言うべきだと主張して争っているというもので、怒り狂った父親は「アクセントは頭にあるものだ」と叫ぶのである。すぐに読者からさまざまな意見が殺到し、ややこしい議論の末にはついに評者の「もうアクセントなんてどうでもいいじゃないか!」という悲

鳴まで登場した。

そこで、このアクセントというものを問題にしてみようと思う。

日本語のアクセントはどのようなもので、どんな機能を持っているのだろうか。

御承知のように、日本語は音の高低を利用する。例えば東京方言の話者であれば、よっぽどの変り者でない限り、御飯を食べる時に使うものをハシと言ひ、川にかかつていて渡るためのものをハシと言ひ、という具合に高低で語の意味が異なる。従って東京方言、及びこれを母体とする全日本共通語ではアクセントは、言語学でいうところの弁別の特徴、即ち意味の区別に関与する特徴を成していると考えられる。

ところで、何かの物の先端のことも「橋」と同じように単独ではハシということがある（実際にはハシッコとかハジと言ひことが多いけれども）。この端に「ハシ」のように後に助詞をつけて文を作ってみると、「橋」はハシガ長イとなるが「端」はハシガ長イとなって高低が違ってくる。このように単独ではアクセントが同じであ

るようにみえて、後に助詞類がつくと違いの生ずることがある。ハ(鹵)とハ(葉)の如く母音が一個しかない単語でも、ハガ大キイとハガ大キイのように助詞によって違いが明らかになる。従って、東京方言ではn拍(東京方言については音節というより、一定のリズムの単位として拍を考へる方が適當。音節とはいえない「ん」や「っ」なども一拍と数える)の語は、n+1個のアクセントを区別することが可能である。

複合語になると高低に変化が生じることがある。ハシを置くものはハシオキなどという。鳴門海峡にかかつている橋を渡るときに「鳴門オオハシヲ渡る」とは言うのは不自然だ。この場合の高低の変化は、ひとつの語としてのまとまりを我々に感じさせるのに役立っている。こうして、助詞類がついたり複合語になった場合の高低の様子をみると、日本語のアクセントは文中で意味的なまとまりを持つ最小部分を、聴覚印象に訴へる役割も持っていることがわかる。

## 二

このように複合語などで高低のパターンが変わること

があっても、アクセントが意味の違いに関わる特徴であるということに対して、疑問の余地はないかのように説明されることが多い。しかし、現代日本語にとってアクセントは果たして絶対的なものだろうか。

日本語全体を見渡せば、方言によってアクセントが多様であることは誰もが知っている。標準語の浸透によって全国の言語差が縮まったようにみえても、地方出身の学生さんたちはやっぱり言葉の違いをひしひしと感じるその中でも、アクセントが違うという言及が殊に多い。しかし、だからといってコミュニケーションに支障をきたすという風を感じることは少ない。

東京にしか住んだことのない人でも、テレビをつければバラエティ番組などで関西出身のお笑いタレントが、「このハシ渡られへん」などと言うのを耳にするだろうが、お箸の上を渡るとは誰も思わないだろう。だいたいにおいて、我々はアクセントに対しては寛容である。関心の中心は、「あ、このタレントは関西の人なのか」という情報の方に向くことが多いだろう。

こうした方言ごとのアクセントの多様性は表面的な上げ下げだけでなく、もっと根本的な構造の違いに根ざし

ている。東京方言では「どこまで高いか」が重要で、それ故「ハシガ」と「ハシガ」の違いが意味の違いに関わっている。それに対して「どこから高くなるか」は重要ではない。東京では若干の例外を除き、一拍目と二拍目の高低が異なるという規則があるが、このようにどんな語にも必ず見られるような特徴は相互の区別に関わらないから、構造的には意味がない(表面的にはかえって重要で、東京人かどうかなどはこの辺からわかったりするが)。このような、極言すれば音韻論的に「どうでもいい」特徴は、音声環境の影響を簡単に受けやすかったりする。二拍目が長母音や「ん」などであると、高低の境界が移ってしまう。例えばトシカツをゆっくり言えばトシカツと言う人も、普段は「トシカツ下さい」と言うことのほうが多いだろう。

方言によっては「どこから高くなるか」が重要であったり、「どこまで低いか」が重要であったりする。また、アクセントの型区別を持たない方言もある。いわゆる一型アクセントがそれだ。大雑把に言ってそのような方言ではハシといってもハシと言っても同じである。語ごとにアクセントが異なるのではなく、音節数ごとに一定の

上げ下げパターンが実現する。パターンが二つの方言もある。

アクセントには不思議なことが多いが、方言どうしを詳しく比較すると、例えば東京でAの型に属している語が京都ではBの型に属す、というような規則的な対応が観察できる。対応する語彙グループを「類」といっているが、同じ類の語彙どうしは意味的には無関係であるので、ちょうど比較言語学でいうところの「音韻対応」(文法講道の類似したX言語とY言語について、X言語でXの音が現われるところに、語の意味分野に関わりなくY言語で必ずYという音が現われるならば、XとYは同系の言語であると推定できる)、と同等に考えることができる。日本語のアクセントに方言間で「類」による規則的対応がみられるということは、これらが相互につながって発達してきた証拠である。音韻対応によって音変化のプロセスが推定できるように、アクセントの研究は日本語全体の変化を推定するのに、重要な鍵ともなるものである。

アクセントはこのような意味でも重要なものであるが、それぞれの方言において各時代ごとにどのような機能を

担っていたのか、これを検証することは難しい。人によっては「日本語にとってアクセントは盲腸のようなものだったのではないか」という人もいる。現に我々が日常接している状況を考えてみても、なかなかその実態は掴み難いのである。

今日の東京のような環境では、多様な方言特徴が混在し変化も被りやすい。日本放送協会編の「日本語アクセント辞典」は、東京アクセントに依拠しており、かつては放送界で働く人々のバイブルでさえあった。際立った変化や新語の登場に応じて改訂を重ねているが、それでもアナウンサーの皆さんの間の年代差などがかなり激しくなっていて、対応が難しいということだ。十年程前に参加した東京生まれの人に関する調査でも、アクセントの揺れは予想以上に大きかった。だいいち、アクセントに対する規範意識自体が三十年程でかなり希薄になっている。「三代住んではじめて江戸っ子と言える」などというが、実際にそんな人を探すのはとても大変であることも同時にわかった。

## 三

このような今の東京で、アクセントの違いだけで意志が通じなかったり、意味を取り違えて失敗する、などというところがそう頻繁にあるだろうか。

アクセントは確かに耳につく。けれどもそれは言葉の意味に関与するというより、先程も述べたようにこの人はどこの人だろう、東京人じゃないみたいだ、関西の人だろうか、イヤ日本人じゃないかもしれないなどと、出自に関する情報源にするのが普通であろう。昔起こったある凶悪な幼児誘拐事件以来、電話の声から犯人の出身地を特定する方法が注目を浴びるようになったが、協力する専門家は現在でもアクセントを有力な決め手にしているという。

英語やドイツ語などインド・ヨーロッパ諸語の多くは音の強弱が主体のアクセントをもつ。スウェーデン語のようにピッチ・アクセントの言語もあることはあるが少数派であり、中には強さの位置が移行する過程で余剰的に高低差が定着したらしセルビア・クロアチア語のよ

うな例もある。強弱アクセントの言語の中にはチェコ語の語頭、フランス語の語末、など、単語の中で強勢の置かれる位置が常に使われている言語がある。ポーランド語では後ろから二音節目、マケドニア語のように三番目というものもある。このような言語では、アクセントは文中で単語のまとまりを聴覚印象に訴える以上の機能は持ち得ないといえる。一方、英語のように単語ごとにアクセントの位置がバラバラな言語の中には、強勢のある音節だけが突出し、その他の音節の聞こえが弱くなった

り、音質が変わったりするものがある。英語では文全体の中で特に重要な語の強勢が極端に強く聞こえ、他の単語の聞こえが弱まるので、「拍」が設定できる程リズムが一定で各音のきこえも均等な日本語に慣れ切った耳にとっては苛酷な事態が生ずる。

このような傾向の強い言語の話者は、概してピッチ・アクセントの習得が苦手といわれる。日本人が強勢に鈍かったりアールとエルの区別を苦手とするのと同じで、普段利用しない言語特徴には鈍感になりがちだからある。しかし我々は外国人の日本語に対して、「今のはアクセントが違っていたな」と思いながらも、コンテキストに気をつけて相手の意図を汲むように注意するし、実際に

間違ふ心配はそれ程大きくはない。逆にいえば日本語のアクセントとは、その程度のものなのである。

いわゆる声調言語であると、こうはいかない。中国語やタイ語はその典型として知られる。これらの言語では単語は本来一音節が基本的で、その一つの母音に一定のトーンが付随してはじめて語の意味が明示される。中国語の初級で必ず習う「四声」がそれである。タイ語には五種類のトーンがある。ネイティブの人によっては、そんなに神経質になることはないという人もいるが、相手に通じるように話そうと思えば声調を無視するわけにはいかない。

日本人は長い間文字だけを通して中国語を、それも古い形の言語を自分勝手の発音で学んできたせいか、外国語を耳から習得するのが今だに苦手なようだ。たいいていの大学で外国語の授業がどうしても講読になりがちなのも、この長い伝統がしぶとく民族精神に根ざしているのだ、ひとえに教師のせいばかりとはいえない面がある。それとはともかく日本語のアクセントはいわゆる声調言語に較べれば、意味区別に与るウエイトははるかに小さい。だいたいにして、アクセントだけで意味の区別がな

される語の絶対数は、単語総数のうちどれ程の割合を占めるというのだろうか。

#### 四

カレシに話を戻そう。

カレシは第一拍目にアクセントがある。これは「頭高型アクセント」と呼ばれている。先程述べたように東京アクセントでは「どこまで高いか」に意味がある。このようなポイントになる拍を「核」と称し、次に音程が下がるのが重要である場合、例えばカレシでいえばカに「下がり核」があると表現される。このタイプのアクセントの語は、後に助詞をつけても「カレシガいる」のように通常高低が変化しない。

一方、カレシの方はカが低く始めてレから高くなり、「カレシガいる」のように後に助詞をつけても高いままである。これは先の「端」のハシと同じ型のアクセントで、「平板型アクセント」と呼ばれる。東京方言では「どこから高くなるか」は重要ではないのだから、高いままで語が終わる場合には核がないことになる。平板型は無核のアクセント型である。

この平板型アクセントが、最近とみにその勢力を伸ばしているものなのである。はじめは主として外来語について、頭高型など核のあったものが平板型に移行する現象が、若年層を中心に目立つようになった。

バイク、ギターしか知らなかった私がバイク、ギターというアクセントを耳にして飛び上がる程驚いたのが、今を去ること十年前であつたらうか。そのうちにアンブ、デッキ、ボード等どんどんその出現頻度が増大し、全然驚かなくなつて自分でもポロッと使ってしまったりするようになった頃には、船の甲板はデッキ、オーディオのはデッキなどという話まで出るようになったのである。

この現象については、ある特定の集団、ある分野を専門とする人々から広まったのではないかということが、当初から指摘されていた。東京外国語大学の井上史雄氏は、若年層におけるこのタイプのアクセントの広がり、各人の趣味・知識情報に詳しい領域等との相関について報告しておられる。つまりこの現象の根幹には、一般に定着しているのと異なる高低で発話することによって別な「色あい」を持たせるといふ、特定化意識が大きく関わっているらしいのである。今はやりの言葉で「差別

化」というのがびったりしそのだが、とりあえず「アクセントによる特定化」としておこう。

「特定化」による高低の組み替え自体は、東京方言にとつて新しくも珍しくもないことである。東京では山、川はヤマ、カワのように尾高型であるが、ヤマ、カワと聞くと「ア、名字かな」と思う仕組みになっている。この現象に関連があるのか、東京の森さんや原さんは他人にはハラさんモリさんと呼ばれても、御自身では「ハラでございます」「モリと申します」と言う人が多い。電話口の第一声でこれを耳にすると、名字に対するこだわりを強く感ずる。

同じことが地名にも聞かれることがあり、その結果「渋谷論争」などというものも耳にする。シブヤとシブヤはどちらが正しいかという議論である。渋谷生まれの知人のひとりには「絶対にシブヤが正しい」派の代表であり、「シブヤなんて田舎モンのアクセントだ」と主張して譲らない。てなことを渋谷モンにさんざん言われでもしたもののか、JR山の手線のアナウンスでも「シブヤ」がよくきかれる。どちらが古いのか、私も田舎モンのひとりなのでわからない。わからないけれども、アクセシ

トに対する東京モンのこだわり、及びアクセントと「自分のモノ」意識の強い関わりをここに実感するのである。語によっては高低の組み替えが強調に結びつくこともある。「あの子バカじゃないの」というのをバを低くはじめると、罵倒度が増すように感ずる。このように、規範の高低パターンを変えて何か差を付けること自体は、日本語のアクセントにとって基礎能力のようなものらしい。いや、もしかしたら日本語全体のアクセントの発達に於いても威力を発揮してきたのかもしれない、などと大それたことをつい考えてしまう。だとしたらカレシが今後のアクセント全体を変えてしまう、ということも大いにあり得るのではないか。

## 五

平板型への移行はこのような「特定化」意識に支えられて、はじめは外来語に耳立つ、言ってみれば「業界用語」のようなものであったようだ。

ギターを例に考えてみよう。学生運動華やかなりし頃フォーク・ソングをつま弾いていた若人たちは、ゼッター確かにギターと言っていた(私もです)。エレキ・ギ

ターが主流になり、いくつかのギター類を組み合わせてバンドでロックをやるのがあたり前になると、楽器本体を指すだけでなくベース(ベースでなくベース)に対するパート(これもパート)としてのギターなどという用法もできて、「こちとらフォークなんかと全然違うんだぜ」てなことになったのじゃなかるうか。ギターをギターとすれば高低をひっくり返すわけで、その聴覚印象上の効果は絶大である。反面、高低の組み替え自体は右に述べたように既に記憶にセットされている。フォークのお兄ちゃんたちも複合語では「ギター同好会」と言っていたのであり、意味が変わらずに高低が変化する可能性は、常に認識されていたはずである。もしかするとアクセント核が消えることによって、単語がそこで終わってしまわず後につながる感じを残すことができる、というような心理的要因もあるかもしれない。また、平板型の方が脳に与える負担が小さいのではないかという説もあるが、そのへんになると実証は難しい。

さて時代は流れて、パソコンの普及は世の中をすっかり変えてしまう。「アタシが皆さんの年頃には、毎日パソコンカードの詰まったカードケース下げて大型計算器セ



ンターという所に行ってカードをランさせて待ち時間表示見ながら待合室で二時間も待ってラインプリンタからバタバタ紙が出てくると全部エラーメッセージだったりしたもののなのよ」と、いつもつい昔話をしてしまうような状況だったのが、あらかじめソフトにゲームまで入ったパソコンを自室に置いて、なんでもそこでできるようになってしまった。マニユアルにドラム、モニターにフアイルにゲーム、モデムにネット……あつという間も驚く暇もない見事な脚韻のオンパレード。

言語において数の力は絶対である。一旦勢力を得てしまつたら最後、「そんな一型アクセントみたいな言い方、ぼくは嫌いだ」などと言つたつて通用するものではない。平成九年の今日平板化傾向は横文字では当たり前といわんばかりの盛況で、遂にそれ以外にも浸透しはじめた。

講義がコーギ、同好会がドーコーカイ、業者がギョーシヤなどは勿論のこと、高くない、面倒臭くなるがタカクナイ、メンドークサクナルのように、形容詞の核が吸収されて本当に一型アクセントかと思うような文節が増殖してしまつた。

都内大田区に住まいするある主婦は男の子二人の母だ

が、目黒区の私立中学に入った次男がこのテの言い方を頻発するようになったのを、「無愛想でぶっきら棒な性格に磨きがかかった」せいだと思つていたそうだ。私は不調法故耳に届かなかったが、将棋好きの友人によれば五年程前から将棋番組のアナウンサーや若い解説者が「同じく、金」の意味の「同金」をドウキンと言うようになったとかで、それを聞くたびに将棋の駒と同衾するみたいな気がして仕方がないそうだ。

かくして、都下の田園都市にひっそりと佇んでいるかに見える当一橋大学キャンパスにおいても、平板型はじわじわと浸透している。試しにある授業で百十七名の学生を対象に、幾つかの語について二種類のアクセントを示してきいてみた。ギターについて、ギターとは言わないと答えた者がそれでも七十六名に上るが、そのうちそんな言い方は聞いたこともないというのはわずかに十一名、「自分は言わないが、ギターは新しい言い方だ」と指摘した者が二十六名いた。ギターともギターとも言う」と答えた者は五十三名だったが、うち三十八名がギターを新しい言い方だと意識しており、カッコイイという評価を与えた者も十八名あつた。

この、両方使うという者のうちにはギターとギターで指す物が違うという意見が若干あった。「ギターは楽器そのもの、ギターはバートのこと」との指摘が七名、「ギターはクラシックやフォークで使うもの、ギターはエレキ」という意見が四名である。同じ意見はギターと言わない者の中にも三名あった。両方のアクセントが拮抗しつつも併存している今日、人間の心理というのは不思議なもので、形がふたつあると何か違いがあるのではないかと思ったり、差があるように聞こえるのか、この場合などは元来差をつけるためのものだったらしいのに、ここまでくると元のモチヴェーションに無縁の人々にも広まって、何か説明が欲しくなる。デッキの例もそうだが、言語変化の過程でよくある「民間語源による理由付け」の立派なケースである。

そんなわけで、カレシ対カレシについてあるところで見えてきたところ、冗談かもしれないが「カレシ」というと使い捨て用の相手」というとんでもない「理由づけ」なども回答の中に紛れ込んでいた次第である。

## 六

カレシと言う娘の背景はこんなところである。一方、お父さんが背負っているのはどんな問題だろうか。過去はともかく、カレシに憤るお父さんは近い将来必ずや「近ごろの日本語は乱れている」という説に賛同する一人になるに違いない。この「日本語が乱れている」という物言いは、何も今に始まったことではない。そのあたりのことを少し考えてみよう。

人はなんらかの価値基準を持っている。その価値基準はその人の一生の間にさまざまなプロセスを経て形成されるものであろうけれども、教育によるものであれ実体験であれ、過去に得た知見に支えられている。そうした知見は言葉によって概念化され、同時に言葉そのものも基準の重要な構成要素として定着する。

言語形成期ということがいわれる。十代の半ばまでにその人の言語が決まるといふ仮説は、戦後の標準語化に関する調査研究の成果を通して指摘されるようになったものであるが、言語・人間・社会という三者の関わりを考えてみれば納得がゆく。人はその頃から社会に組み込まれ、その規範に順応することによって社会化されると同時に、社会の中で自己を表現する手段を得るのだ。言

語は社会化の手段であると同時に規範であり、価値基準として人を支配する力を持つ。

カレンと言う高校生の娘は、自分の属する社会でスタンダードな地位を確立した規範を自然に受け入れているのであって、世間に対する反抗心をいちいち意識してはいなからう。反抗どころか、ある価値基準に既に組み込まれてしまっていて、父親にアクセントの違いを指摘されても、どこがどう違うのかという判断さえ覚束なくなっているかもしれない。しかし、娘の属する社会と無関係に生きている父親にとって、このアクセントは彼の拠って立つ価値基準を揺るがせにする程の事件である。

こんなとき、人は俄然コトバにこだわる。ものごとに対して普段淡泊で柔軟な人が、言葉のことにになると頑固に自分の基準を主張することがある。「日本語乱れ説」を盛んに持ち出すのが、一見リベラルで客観性を看板にする知識人に多いのは無理もない。何故とって知識人と言われる人々こそは、忠実であるか反抗的であるかにかかわらず、過去の価値基準に対する意識が強烈な人々であろうから。

人間が未来を完全に予測できない以上、過去に形成さ

れた価値基準に依拠して生きてゆくのは必然である。血気盛んな青春時代の体験がしばしばその人の価値観を決めるように、民族が自我に目覚め経済力が増し、さまざまな文化が開いた時代の言葉は、その後も長く影響力を発揮する。その時代の口語が文字を得、格調高い文語となって継承されると、よほど大きな社会変革でもなければなかなかその伝統は崩れない。英語のように現代口語の実態を全く反映していない正書法が權威を保っているのも、文字言語の保守性をよく表している。ロシア人はとくに発音されなくなった文字を長年綴り続け、社会主義革命のついでとってはなんだが、今世紀はじめにやっとその習慣を捨てることができた。

人が言語に対するとき保守的になりがちなのは、自己防衛の一種であるかもしれない。社会の変化が緩やかであれば、新しい価値観とのギャップを感じる度合いも小さかろう。しかし変化が急激であればある程、自らの価値基準との相克に直面せざるを得まい。新しい基準にいちいち自己を合わせて生きてゆくのはしんどいことだ。ある基準に支配されてしまったら、それを打ち破るためには大きなエネルギーが必要になる。

ルーズソックスを履く細い眉のお姉ちゃんや、だぶだぶずり落ちズボンを穿く茶髪のお兄ちゃんたち、既存の価値基準に漠然と反抗し、といって独自の価値観もまだ漠然としている新興集団の彼らは、自分たちの存在を何らかの形で特定化し、集団としてアピールし、それによって彼らだけのアイデンティティを確立する必要があると感じているに違いない。言語も服装も、特定化の大切なアイテムである。これをより規模の大きい問題に置き換えてみれば、まさにナシヨナル・アイデンティティと、民族衣装や民族語の関係と同じではないか。

日本人は言語と自らの民族性の関係を日常的に意識しているとは言い難い。日本人にとって日本語は空気のようなもので、日本人であれば日本語を話すのは当たり前である。このような状況は世界的にみれば特殊であり、例えばヨーロッパの中で比較的民族自立が遅かったスラヴ諸民族においては、いわゆる西欧諸国におけるより母語に対してはるかに意識的な対応が随所にみられる。西側だとて、各民族が今の形で独立したのはそんなに昔のことではない。その様子をまのあたりにするならば、民族全体の問題としてのナシヨナリズムも、カレシ・アク

セントへの反発と無関係ではないことが感じられる。

民族アイデンティティの危機などさらさらなく、階級社会ではおよそなく、地域差も階層差も性差さえかなり希薄になっている今日の日本において、多くの人が日常的に感じる自己規定要素として年代差がよくいわれる。「たったひとつ歳が違うだけで、もう話が合わない」という話があるくらいだから、「世代」などという悠長なものではなさそうだ。これなども一種の立派な「ナシヨナリズム」である。「年代」によって何がそんなに違うのか？ 激しい社会変化の中で泡のように生まれては消えてゆく雑多な文化現象、時代という漠然とした言葉で括られるものを共有し、どのような教育を受け、価値観を得、それをどのようなコトバで表現してきたか等々、人々の自己規定はこのあたりに依拠しているのではない。言語現象を追っかけている私の目にはそう見える。

言語がナシヨナリズムにはまってしまったら、外から見て聞いて違う違わないは全く意味を持たない。娘にもお父さんにも、意識無意識はさておきそれぞれのアイデンティティがあり、今ここにカレシのアクセントをめぐって価値基準の対立が明らかになったところである。

## 七

言語がこのようなものである以上、人間が言語に対して客観的立場を絶対的に維持するのは不可能に等しい。ところが、言語現象に関してその意味や変化の背景などを知るためには、客観的な観察が不可欠である。地球の気象を観察して自然現象を説明することは、雨が降らないと作物に影響が出るという社会的事情であるとか、青空が好きというような個人的感情とは何の関連もない。同様に、カレシ型アクセントの拡大とその好き嫌いとは全く次元の異なる問題である。勿論、学問研究全般において客観化が不可欠であることは論をまたないけれども、言語が音や文字という「客体」を介している以上、言語の性質を見ずに、これを専ら人間の精神や社会活動の側から取り上げるだけでは十分でないし、言語の性質を見誤る恐れが大きい。

言語と「ナシヨナリズム」が不可分であることを認識し、自己の客観性に対する絶え間ない反省のないところに、客観的な言語研究はあり得ない。いうまでもないことだが、「カレシ・アクセントが気に食わない」「日本語

は乱れている」などと言うだけでは、言語研究は行き止まりになってしまう。それはあなたがカレシと言うか言わないかということとは次元の異なる問題なのだ。

ついでに述べるなら、世の中で言語学といわれるものの中には、いろいろな性格のものが混在している。言語学を専攻しているというのと、たくさんの言語を話したり読んだりできるのかと言われたり、特定の言語を完璧に使いこなせるのかと思われたり、或いはソシユールやチヨムスキーの専門家かと思われたりもする。また、言語と人間の思考について深く考える哲学者かと思われることもある。しかし、これらの問題と言語そのものの観察とは、やはり同じではない。先人たちが言語についてどのように考えたかということは勿論興味深い問題であり、これも一研究領域ではあろうけれども、それと古今東西個々の言語変化を考えることとは、これもやはり次元の異なる仕事である。

敬語についても相変わらずいろんなことが言われている。駅の講内アナウンスなどには確かに爆笑ものもあるが、日本人の美德と言われたへり下りに関係する表現はとくに変化が激しく、既に数を得ている新現象もある。

昔は子供のおやつも猫のご飯も、「やる」ものであった。それがいつしかおやつは「あげる」ものになり、そのうち猫のご飯も「あげる」ようになり、一九九六年末のあるテレビ料理番組では、遂におせちの昆布巻きに煮汁をかけて「あげて」いた。デパートの化粧品売場のお姉さんに、「眉をもう少しお手入れして差し上げて下さいね」と言われた友人もいる。

敬語は対人関係に連動しているから、対人関係が変われば変化せざるを得ない。かつてはそこら中にわんざといて泣いたり喚いたりしていたガキどもが、今ではみんな大事なお世継様である。台所に忍び込んでくる泥棒猫を追っかけていたのが、やれ血統書つきだ「うちのかわいい子」である。世の中はすべて平等が基本という風潮の中で、「やる」は権力を嵩にきたぞんざいな臭いが強くなり、「あげる」がそれに対応する丁寧体から、やがて対人関係に左右されない一種の「美語」になった模様だ。「やる」の方はますます下落が甚だしい。

ここまでくると抵抗は虚しい。学校で「花に水をやる」と言っていて、「言葉が悪い」と注意された子がいるそうだ。十五年以上前のある調査では、文京区の住宅地の

奥さんたちの一部は、その頃既に花に水を「上げて」いた。人称詞などにとくに顕著だが、対人関係に関わる語や表現では、より評価の高いものがより低い方へ、という価値の低下がよく起こる。方言周圏論になるかどうかからぬが、私の地方では「くしてやる」はとくに悪い言葉ではなかった。上京したての頃「今日はおごってやる」と言ったばかりに、東京生まれの同級生に軽蔑された苦い思い出がある。東京では二十五年前のその頃既に「やる」の価値は完全に低落していたわけである。

「くさせて頂く」をやたらに連発して問題になった政治家がいた。この人などはこれまで世間でエリート扱いされてきた人種であるために、へり下りの姿勢を殊更に心がけたのであろうが、暴走した挙げ句なんでもかんでも「くさせていただく」ようになり、へり下りが行き過ぎて、かえってエリート臭を漂わせてしまったようだ。しかしこの表現、彼だけじゃない、パーティや儀式やマスコミでもやたらと出現するようになってきている。このままいくとどんどん対人関係を離れて、イヤミの丁寧体なんてものになるかもしれない。

社会が変化する限り言語も変化を免れることはできない

い。しかしその変化の方向は必然的に決まっているわけではない。どんな変化をはじめは少数派である。サピアがその名著「言語」で優れた表現に残したように、変化の可能性は無数にあり、小さな流れが絶え間なくあちこちへ動いているが、さまざまな要因によってやがてひとつの大きな流れへと収束してゆく。

さてそこで、平板型の蔓延は日本語のアクセントの今後にどのような影響を与えるだろうか。

これに関連して、気になっているもうひとつの現象がある。ある種の漢語系熟語で従来平板型であったものが頭高に発音される傾向である。この現象は、財政、行政、政治、政策など、主として政治経済関係の用語に頻繁に現われるが、気になりはじめは三年程前のある日の山の手線内で都内の女子高の制服を着た女の子の、「私ってシヨーションなのよね」という発声である。話の内容からこれが「小心」のことだと、暫くしてやっと気がついた。ある日の公共放送の番組でも、中年の解説者は一貫してザイセイにセイサクだった。このアクセントは昔から選挙演説や国会で耳立っていた。政治家の出身地はまちな

ちであるからどこか特定の地方的特徴が定着したとは考えにくく、もしかするとこれも平板型の普及と同じく、ある種の強調、或いは政治屋さんたちによる「特定化」かもしれない。この現象は一般化するだろうか？

などと思っていたら、一橋では財政はザイセイがスタンダードだという報告が入った。早速これも調べてみたところ、これに対しては抵抗が強く、例えば行政をギョーサーーとは言わないという者九十名、中にそんな言い方は聞いたこともないという者が十二名いた。残りは両方言うと言っているが、いろいろ除くとギョーサーーに全く抵抗のない者は十名のみである。しかし、頭高に限らず他にも平板型の熟語に核が出現している例もあり、各人の属性との関連や都内の他の地域との違いなど、調べてみたいことのひとつである。

この現象と併せてみると、アクセントの行方についてふたつの可能性が考えられると思う。

ひとつは、新しい平板化によって余りに無核のアクセントが増えたために、一種バランスを取ろうとする力が働いているという可能性である。新しい平板アクセントは頭高型に多く起こったので、頭高アクセントの語の数

が俄然少なくなってしまう。同時に核そのものが存続の危機に曝されるようになつた。そこで空いたところに今まで平板型だった別のグループの語が入りこんだのではないか、という考えである。言語変化の過程でこのような現象は決して珍しいことではない。

もうひとつは、このまま東京方言のアクセントが意味区別に関わる資格を失う方向にどんどん進み、その時々いろいろな「特定化」に関わるウェイトが大きくなり、核が消滅して遂には一型アクセント状態に至る可能性がある。実は現在の一型アクセントは、異なるタイプのアクセントがぶつかりあった所に生じたのではないかという説がある。アクセント盲腸説の先人も「いずれ日本中がみんな一型アクセントになる日がくるかもしれない」と言っている。大都市東京への急激な人口流入によって多種多様なアクセント・タイプがぶつかり合い、しかも東京の基層体系の力が弱まって雑多なタイプを吸収でき

なくなつた結果、アクセントはいわばアナキー状態に陥りはじめているのかもしれない。

そういえばやはり近ごろ話題になつている「半疑問」や、コンビニなどでよく耳にする若い店員さんの語尾強調現象、ニュースや会議などでも頻繁に聞かれる助詞類を高くした本読み調的現象など、新しいタイプのイントネーションが広まっているが、これも語レヴェルでのアクセント核の崩壊と関係があるのかもしれない。いずれにしても日本語にとって看過できぬ大きな変化であり、だとすると我々はこれから大変な事件に立ち合うことになるわけである。

若者の皆さん、これからもあなたがたの言葉をじっくり観察サテ頂キマス。本学キャンパス内で「ちょっと言葉についてきかせて下さい」と話かけられたら、勧誘なんかではありません。どうか協力してヤッテ下さい。

(一橋大学教授)